

3月例会レポート



3月10日（日）午後2時より、東京海洋大学品川キャンパス白鷹館で、3月例会が開かれました。海よりの風はまだ冷たいものの、構内の榊（タブ）の木の花芽は膨らんできました。

参加者は47名、ジョニー平塚氏の司会で和やかに始まりました。まずソウルから直行参加の金利息さんのご挨拶がありました。舞の名手でもあられる金さんは、この度青麗文庫の第一号となる句集『くりうむ』を上梓されました。次に高田主宰から、長谷川權氏が3月10日付の朝日新聞コラムに黒田杏子先生一周忌に寄せた「花の山姥」を執筆されたこと、また、黒田杏子俳句コレクション最新刊『雛』の読者からの温かいお便りが報告されました。

いよいよ3句出句3句選の句会開始。互選の披講に耳を傾け、紙を繰る音に期待と落胆が交錯します。次いで高得点句（7点・6点）の名乗りと鑑賞では、拍手も湧きました。



小休止の後はお待ちかねの主宰選です。今回は、☆が16句、☆☆が6句、☆☆☆が8句でした。講評が進むうち、選ばれた句は動詞の省略が効いていたり、季語や言葉の置き方が秀逸で、感動を共にできると納得しました。

そしてファイナルは主宰による出席者全員の句の講評と添削で、一同気合を入れ直します。正子マジックさながら、助詞や語順を替えることで句に勢いが出て生き生きしてきたり、逆にサクサク行くより言葉を選ぶことでテンポを緩め、一句の趣がより深まることも学びました。推敲は大切ですね。

「俳句は述べるより示す！」と、動詞で説明するより名詞に語らせよと教わりました。初心の頃はついアレコ

レ詰め込み過ぎますが、焦点を絞れば鮮明に伝わりとも。

「小手先でいい感じの言葉を連ねて作るのではなく、自分の体験に結び付けて実感のある句を！」というアドバイスを胸に刻んで、4時半に閉会となりました。涼やかにしてパワフルな主宰の一語一語が、深く響く例会でした。



(文責:酒井あとり)

(写真提供:杉崎文子)